

2009 年度・2010 年度 活動報告書

アフリカンキッズクラブ

～大きい子も、小さい子も、ちょっとずつアフリカン～



―目次―

1. アフリカンキッズクラブ

1) 発足の経緯

2) 活動の方向性

2. 活動報告

1) 2010 年度の活動を振り返って

2) 2011 年度の方向性

3. 在日アフリカ人家族の生活を考える会

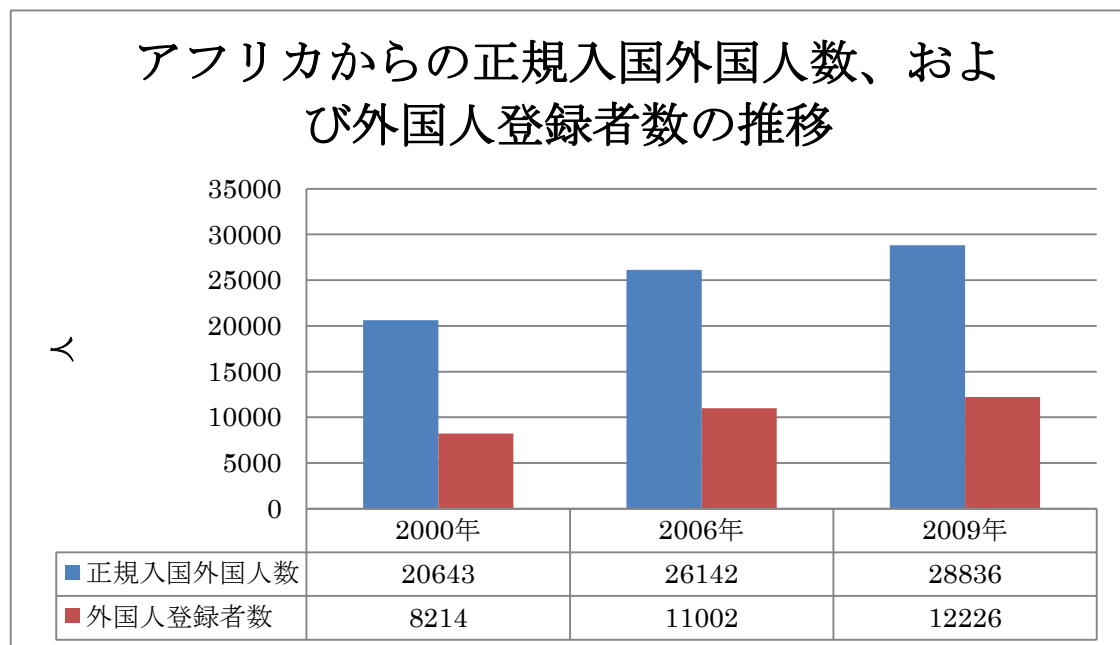
1) 概要

2) 活動報告

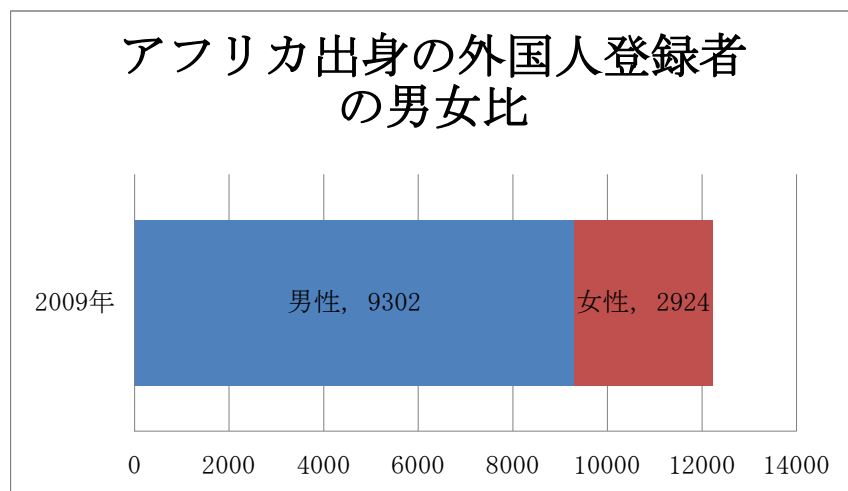
1. アフリカンキッズクラブ

1) 発足の背景

2006 年に法務省が発表した『世界の統計』では、我が国に滞在するアフリカ出身の外国人登録者数¹は 11020 人と報告されている。これは外国人登録者数の約 0.5%に相当し、ここ数年その割合に格段大きな変化は見られない。中短期の入国者数の延べ数は、2000 年ごろから 2000 人を超え（グラフ 1）、観光やビジネスなどを含めたアフリカ―日本間の行き来が一層活発になっていることがうかがえる。2006 年におけるアフリカ出身の外国人登録者数の男女比は、男性 8423 人に対して女性 2579 人と約 2.5 倍もの差があり（グラフ 2）、職業別内訳からは、留学や就学、就労など U ターンを念頭に置いた来訪者よりも在留者の割合が大きいことがわかる（グラフ 3）

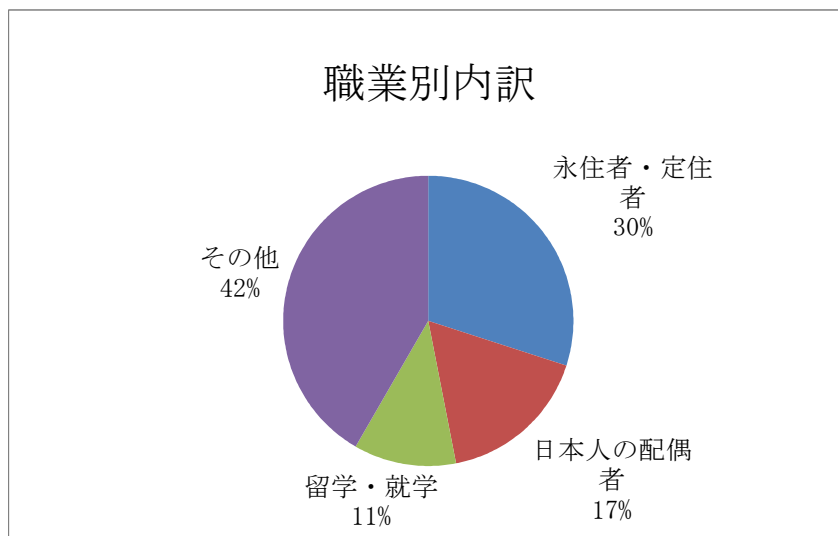


グラフ 1（出典：2008 年度活動報告書、国籍別在留資格別外国人登録者、港別入国外国人の国籍）



グラフ 2

（出典：国籍別男女別外国人登録者）



グラフ 3（出典：
2008 年度活動報告書、国籍別在留資格別外国人登録者、
港別入国外国人の国籍）

在留外国人の増加とは、すなわち日本社会に深いかかわりを持って生活する外国人の増加である。U ターンせずに在留するアフリカ人の増加は、在留外国人の中におけるアフリカ出身者の存在を内外に示しただけでなく、他の在留外国人と同様に（あるいはそれ以上の）、労働条件や在留資格にかかわる法制度的問題、教育や保健制度などにある壁、外見からの差別や偏見、習慣の違いからの文化的問題など、多くの課題があることを露呈した。特にこれらは、在留歴の比較的浅いアフリカ出身者にとっては超難題となっており、特に日本国内での生存を左右するものにもなる。いま、我が国では、在留する外国人に対して社会協調を求めるだけは不十分で、彼らを受け入れる日本社会に内在する課題への取り組みの必要性をも暗示している。例えば、グラフ 1 にある通り、2009 年におけるアフリカ出身の在留資格者のうち、日本人を配偶者に持つ割合は 2093 人に達する。実際問題として日本人がアフリカ出身の家族を持つと、これまで自らが経験したことのないタイプの壁にぶち当たり、実態の收拾に孤軍奮闘することになる。特にアフリカと日本の二つのルーツを持つミックスキッズの教育やしつけを行う日本人の母親にとって、自らが知らない配偶者の国の情報を得る機会が多くないし、経済的、時間的制約から配偶者の国に行った経験のない人も多い。しかし、日本国内にはこのような在留アフリカ人やその家族に降りかかる諸問題にとりくみ、これをサポートする団体はほとんど存在しない。

2005 年、アフリカ日本協議会は、自らもアフリカ出身の配偶者とその間にアフリカ系ミックスキッズを持つ理事から「アフリカ人家族が集まってみんなで遊び、彼らのもう一つのルーツであるアフリカを感じるイベントを開催してはどうか」という提案を受け、アフリカンキッズクラブを発足するに至った。現在、アフリカンキッズクラブはアフリカにルーツのあるミックスキッズやアフリカに興味のある子供たちの交流の場、学びの場を提供することを目的に活動を展開している。運営は、同クラブのコアメンバー（以下、企画運営グループ）とアフリカ日本協議会事業担当スタッフによる協働による。年に数回開催されるキッズクラブイベントの企画については、企画運営グループが定期的にミーティン

グを開き、大枠を決めている。

2) 活動の方向性

アフリカンキッズクラブは、アフリカ系ミックスキッズやアフリカに興味のある子供たちが、様々なワークショップを介してアフリカ文化への理解を深めるとともに、普段の生活ではあまり出会うことのないアフリカ系ミックスキッズ同士が知り合い、交流できる場を提供している。さらに、アフリカ系ミックスキッズを持つ親同士の交流の場、出会いの場としての役割も大きく、毎回のイベントには保護者の積極な参加、協力がある。発足当初は幼児期にあった子供たちの学齢期への移行などによって、近年の企画運営グループのミーティングでは新しい方向性が提示されている。それは「楽しむ」から「体験する、学ぶ」、また「遊ぶ」から「発信する」である。これは、キッズクラブに対して「アフリカを学び、アフリカを体験する」という期待が加わったためであろう。企画のためのミーティングで「～を体験してもらいたい」「～を知ってほしい」「キッズクラブでの体験が親子でアフリカの話をするきっかけになれば」などの声が聞かれたことから伺い知ることができる。

アフリカ系ミックスキッズをもつ親の、現地の教育や子育てへの関心は想像以上に多くう。特に、辺境地域の町や村レベルにおける教育、子育て事情の情報を個人で収拾することは困難を極め、現地で子育てを経験した人からの話が唯一の情報源となっている。今、アフリカンキッズクラブは類似の状況下にある人たちの道しるべとなり、また在日アフリカ人家族の状況を周りの人々に知ってもらい理解してもらうことを必要としている。

2. 活動報告

2005年に発足したアフリカンキッズクラブのイベントは、通算18回を迎えた(表1)。2009年度は第13回から第15回まで、2010年度は第14回から第18回までのイベント開催、それぞれの年にアフリカンフェスタにおいて活動紹介およびアフリカンヘアの編みこみ体験を行った。

1) 2010年度の活動を振り返って

2010年度の活動を振り返って、人数がよく集まっていたとの声が聞かれた。アフリカンキッズクラブの知名度が上がってきたことがうかがえる。反対に、改善点としては案内の遅れが指摘された。これは、期日が決まらないため会場の確保が難しくなるということから来ているようである。例えば、アフリカンキッズクラブイベントで頻繁に使用されるJICA 地球ひろば講堂の予約は、開催の6ヶ月前から可能であるから、来年度は開催の1か月前には案内が回るようになることを目指したい。

2) 2011年度の方向性

2011年度のイベント実施に向けた企画ミーティングでは、例年同様の時期、規模でイベントを行う事が確認された。2011度も夏、秋、冬と年3回程度のイベントを行う計画を立てている。また以前から声のあがっている宿泊を伴うイベントの実施を検討したり、

有志企画として夏休みには 2 回のイベントを開催してはどうかという声も聞かれた。冬のイベントに関しては、「アフリカの遊び」を取り入れてもらえるように事前に案を投げかけておくべきであろうという指摘もされている。

回	タイトル	開催月
第 1 回	アフリカってどんなこと？～話してみよう、私のアフリカ、あなたのアフリカ～	2006. 1
第 2 回	アフリカの動物を探そう！in 上野動物公園	2006. 1
第 3 回	アフリカンキッズクラブ in 日比谷公園（ピクニック）	2006. 6
第 4 回	ドンドコドン！みんなで踊ろうアフリカダンス	2006. 8
第 5 回	みんなで楽しむアフリカ、ガーナのわらべ歌	2006. 12
第 6 回	アフリカンキッズまるかじりサロン～みんなでアフリカの文化に触れてみよう～	2007. 4
第 7 回	親子で楽しむ、自由で楽しいアフリカお絵かき教室	2007. 8
第 8 回	親子でアフリカの文化を楽しもう～コンゴ民主共和国編～	2007. 12
第 9 回	親子でアフリカの文化を楽しもう～マリ共和国編～	2008. 3
第 10 回	親子でアフリカの文化を楽しもう～ガーナ共和後編～	2008. 6
第 11 回	ニャマ・カンテさんと楽しもう！西アフリカの歌とダンス	2008. 11
第 12 回	親子で行こう！ナイジェリア丸ごと体験学校	2009. 2
第 13 回	アフリカンキッズクラブ 夏休みのイベントだよ！～アフリカンキッズクラブ ワンデー・サマースクール～	2009. 8
第 14 回	親子でアフリカの文化を楽しもう～コンゴ民主共和国編～	2009. 11
第 15 回	おしゃれなアフリカに触れよう！アフリカの服、アート、食べ物	2010. 2
第 16 回	キッズのためのミニ音楽会 ジンバブエの楽器ムビラを聴いてみよう！	2010. 7
第 17 回	サッカー・ワールドカップが開かれた国、南アフリカってどんな国？	2010. 11
第 18 回	たのしいアフリカに触れよう！日本とアフリカの遊びを一緒に	2011. 2

表1 これまでに開催された、アフリカンキッズクラブのイベント
（参考：2008 年度報告書）

3) イベントレポート

アフリカンキッズクラブ 夏休みのイベントだよ！～アフリカンキッズクラブ ワンデーサマー・スクール～@四谷ひろば

日時：2009年8月1日

場所：四谷ひろば

備考：国際交流基金日本で実施される異文化理解促進事業

【内容】

アフリカで人気のスポーツといえば“サッカー”。来年は南アフリカでワールドカップが開催されるということで、現地にいなくても気になるところ。そんな気分を今から盛り上げようということで、在日アフリカンのパパさんコーチのもとサッカー教室が開かれました。

西アフリカセネガル出身の2人のコーチは普段セネガル人チームでプレーしていることもあり、ユニフォームもバッチリ決まって「さあ、開始！」



子ども達は3歳～8歳までと年齢層が広く、また「サッカーなんて初めて」という子もいました。コーチはひとり一人丁寧に、まさに手取り足取り教えていました。コーチのお手本みたいには上手くないけれど、何度も練習するうちに様になりもう「試合したい！」という子どもまであらわれました。



基本練習の後はいよいよ試合です。子どもと大人のミックスチームで試合開始です。両チームのゴールキーパーには子どもが立ちただけで、“絶対にゴールは入れさせないぞ”とばかりに必死にボールの動きを見えています。子ども達は大人の半分くらいの背で隙間をぬって動き回ります。



同チームの大人と子どもが協力してさあシュート！しかし、なかなかゴールを許してはくれません。結局2-0で勝負がついたときには子どもだけの対抗試合になっていました。普段はなかなかアフリカンパパさんたちを交えて何かをする機会がないので、心なしか子ども達もはりきっているようでした。

大人と子どもが集まって一緒に何かをする機会の少ない在日アフリカンファミリーや知り合う機会の少ない他の方々とサッカーを通じて少しだけ親密になれた1日。自分のパパがサッカーと一緒に汗を流している姿はちょっぴり恥ずかしくもあり、誇らしくもあったサマースクールでした。

コーチをしてくれたパパさんは「サッカーの上手い下手は関係ない。ボールひとつで一緒になって時間を共有できたことが楽しかった。こんなサッカーチーム他にはない。またやりたいね〜。」とうれしそうに話してくれました。

来年のワールドカップは家族で観戦？南アフリカに行っちゃう？さてさてどんな盛り上がりを見せるのでしょうか。



親子でアフリカの文化を楽しもう～コンゴ民主共和国編～

＠上野ターミナルホテル会議室

日時：2009年11月15日

場所：上野ターミナルホテル会議室

備考：国際交流基金日本で実施される異文化理解促進事業

【内容】

11月15日（日）、上野駅ターミナルホテル会議室を会場に、アフリカンキッズクラブイベントを開催しました。

風邪が流行っていたため、当日、参加できなかった家族もありましたが、12組26人の参加者がありました。テーブルに何種類もの楽器を置き、ドラムに向かって座ったムクナさんの指導で、最初にコンゴ民主共和国のことばであいさつを教わりました。

何度か練習をしているうちに、みんな覚えたようです（家へ帰ってから、参加した姉妹同士でコンゴのあいさつを交わしている、との連絡もありました）。



続いて、それぞれに用意してきたペットボトルに、豆、ビーズ、ひまわりの種などを入れて、マラカスを作りました。中に入っているものによって音が違います。このマラカスを手に持って、ムクナさんのドラムの音に合わせて振ります。上から下へ振り下ろして音を出します。

今度はダンスです。

アシスタントの人が、ムクナさんのドラムにあわせて踊るのを見ながら、同じように体を動かします。

最初は下に置いておいたマラカスを、途中から手に持って、振りながらダンスをしました。





休憩の後は、コンゴの東部で使われているスワヒリ語でのあいさつも教わりました。

ムクナさんが叩いていた大きなドラム、用意された楽器に触れて、音を出しました。

さらにコンゴに関する質問タイムもありました。

しばらくぶりの参加者、この日が初めてという参加者もいましたが、み

んなそろって大きな声であいさつを交わし、マラカスを振ってダンスすることができました。



○参加者アンケートから

アフリカの国の文化や遊びに触れることのできるイベントを期待している。

会場が狭かった。広尾の地球ひろば講堂だとよかったのに。

※ 申し込みが遅れて、地球ひろば講堂を確保できませんでした。

質問をもっと丁寧に通訳して欲しかった。

おしゃれなアフリカに触れよう！アフリカの服、アート、食べ物

@JICA 地球ひろば

日時：2010年2月14日

場所：JICA 地球ひろば

備考：国際交流基金日本で実施される異文化理解促進事業

【内容】

2010年2月14日（日）、「おしゃれなアフリカに触れよう」と題して今年度最後のイベントが開催されました。

今回はアフリカ理解プロジェクトの方々とガールスカウトの皆さんが中心となつての企画でした。女性（女の子）としては“おしゃれ”と聞いて興味深々。会場に入った時、華やかな民族衣装をきた人達が目に飛び込んできて気分がいっそう盛り上がります。



まずはガールスカウトの皆さんによる劇です。「コーヒーの始まりの物語」というもので、参加型の劇でした。エチオピアが世界中のコーヒーの起源になっている（一説）ということを知りエチオピア産コーヒーを味わいたくなりました。でも最初はコーヒーの赤い実を食べたというのですから、その実もとっても気になる！飲むコーヒーとはまた違った味わいだろうな。。。探して

みればもっと多くの種の起源が発見できそうなアフリカの可能性を感じました。

子供達がクラフトやゲームに熱中しているあいだ、大人向けのミニ講座ではジンバブエの教育事情について説明がありました。ハイパーインフレや独裁政治など正直あまりいい印象をもっていなかった私ですが、意外にも識字率の高さに驚かされました。教育制度はイギリスのものが色濃く残されており時間割のなかに“ティータイム”とあったのが驚きでした。ひとりの親として、将来の国作りを担う人材が育つことを願わずにはいられませんでした。

そしてお待ちかねカンガの着方とファッションーです。色々な模様のカンガを1枚、2枚と着付けてもらいお披露目です。多様な着付け方がありお互いに見あいながら「素敵！かわいい！夏に使いそう、これどう結んでいるの」などと言いながら思い思いの格好が完成しました。カンガの模様もさることながら、そこに書かれたメッセージ（カンガセイイング）もおしゃれに着こなしてしまおうという発想がなかなかのも



のです。カンガ選びに熱がはいってしまいそうな女心をくすぐる新発見でした。

これまでの企画では西アフリカのものが多かったですが、今回東アフリカのことを知る機会になって改めてアフリカの多様性を実感しました。知ることと比べてみることでより多くの発見ができた日でした。また意外なところで日本とのつながりを知った時、もっと知りたいと好奇心が刺激的されるイベントでした。



○参加者アンケートから

子どもが楽しそうなのがうれしかった

子どもも楽しめて、また色々なアフリカを知ることができました

おやつがとてもおいしかったです。また、ジンバブエの教育についてのプレゼンが勉強になりました。

在日アフリカンファミリーの方と、日本で暮らしていくことについていろいろと話し合える企画を期待。

大人向けのものも企画してくださると嬉しいです。

キッズのためのミニ音楽会 ジンバブエの楽器ムビラを聴いてみよう！

@JICA 地球ひろば

日時：2010年7月31日

場所：JICA 地球ひろば

【内容】

今回は、音色もリズムも太鼓とは違うジンバブエの楽器・ムビラを聞きました。

ムビラとはジンバブエの指ピアノのこと。指ではじめるその音色は繊細なような力強いような、耳に心地の良い独特なものでした。

まずはジンバブエの場所を地図で確認して・・・



演奏がスタート。ムビラの音に合わせて、キッズも大人も体を動かしながらリズムになじみました。演奏をしてくださったパシチガレ・ムビラズの方々の動きを真似しながらステップを踏んでみます

参加者の動きがリズムにのってくると、ムビラの響きがさらに動きを引き出していきました。会場全体がムビラの美しい音色と小気味よいリズム、そしてうっとりするような歌声

に酔いしれながら、体中で音楽を楽しみました。





休憩後は、ジンバブエに関するクイズです。パシチガレ・ムビラズのジンバブエ人メンバーが、クイズの答えを発表するとびっくりするようなこともわかります。ジンバブエの子どもたちは、黒いインクのボールペンをお土産にもらっても喜びません。どうしてでしょうか？

黒いボールペン、赤いボールペンは先生が使うもの、生徒

が使うのは青いボールペンだからなんです！

また、ムビラの説明を聞いたり、演奏しているところを後ろからも見せてもらいました。

さて、これがムビラ。

鍵盤を指ではじいて音を出すのですが・・・これがとても難しい。パシチガレ・ムビラズの方々の指の動きの速さは「修行」が必要な、ムビラ演奏の奥深さを物語っていました。

最後におやつタイム。ジュースを凍らせたアイスバーのおやつが冷たくておいしかったです。

たくさんの子供たちと大人が集まった“あつい”夏の日となりました。



サッカー・ワールドカップが開かれた国、南アフリカってどんな国？

＠新宿区戸塚地域センター

日時：2010年11月21日

場所：新宿区戸塚地域センター

【内容】

今回は拓殖大学アフリカ研究同好会の運営のもと、サッカー・ワールドカップが開かれた国、南アフリカについて知るイベントを行いました。ワールドカップにまつわるクイズから、紙粘土やぬり絵をして国旗を作ったり、南アフリカにいる動物の写真を見る、実際に使われている硬貨あてクイズをしたり・・・見るだけでなく実際に触って楽しめるイベントが盛りだくさんでサッカー・ワールドカップの事、南アフリカの事を知



ることができました。

ワールドカップ中、TVから聞こえてくる事の多かったブブゼラ。本物のブブゼラもあり、実際に吹いたり音を聞いたりすることができました。やはりブブゼラはかなり大きな音が出て、驚きも大きかったです。また、塗り絵をする子ども達の目も真剣そのものでした。色鉛筆を使って上手に色を塗って・・・出来上がった

ものはアフリカ大陸の地図に貼っていきましました。思い思いの色で彩られた国旗によって、カラフルな地図が完成しました。





子ども達がゲームで盛り上がっている間、大人たちはというと、あるビデオを見ました。それは、キッズのお母さんのご主人がセネガルへ里帰りされたときのビデオです。その中には、空港から家までの車窓の風景や、セネガルの家庭料理、そして命名式の映像がありました。命名式はイスラム教国である影響もあるらしく、男性だけが参加できる、とか、その後のダンスパーティーには女性だけが参加できるというような決まりがあるのだそうです。セネガルからの実際の映像にみんな興味津々、終始パソコンの画面に釘付けで、解説して下さいなお母さんのお話に聞き入りました。



そして最後のお楽しみ、本日のスナックは、南アフリカの名産ルイボスティとルイボスティクッキーでした。アフ研の方が作って持ってきてくれました。とても美味しいクッキーで、子どもも大人も食べる手が止まりませんでした。

イベント当日は、風邪を引いてしまい参加できなくなったキッズが多く少し小ぢんまりとした会になりましたがその分、親密な和気あいあいとした交流が出来たと思います。みんな

で楽しい時間を過ごす事が出来ました。



楽しいアフリカに触れよう！アフリカの遊びと一緒に！

@JICA 地球ひろば

日時：2011 年2月 11 日

場所：JICA 地球ひろば

【内容】

雪の舞うとても寒い日、会場にはたくさんのキッズとガールスカウトの子ども達が集まりました。本日のアフリカンキッズクラブイベントは、アフリカ理解プロジェクト、ガールスカウトとともに日本とアフリカの歌や遊びで友だちの輪を広げ、カンガ（東アフリカの民族布）の試着でアフリカの雰囲気を感じてみました。

まずは、みんなで歌をうたって「こんにちは」の挨拶。楽しい歌のリズムに合わせて仲良くなります。



そしてグループに分かれてゲーム！塗り絵やバンブーダンス、長縄などを色々なゲームをしました。バンブーをたたいてくれるお姉さんと息を合わせてジャンプ！なかなか難しいですが、体を動かしてアフリカのリズムを感じました。さて、こちらは塗り絵をしている様子。イベントの最初にみんなで作ったアフリカン・カラーのプレスレットをつけた手で真剣に作品を仕上げています。み

んなで顔を寄せ合って仲良く取り組みました。



そのあいだ、大人向けにはコーヒーセレモニーの紹介。キッズだけでなく、お母さんたちもアフリカの文化に触れ、アフリカの体験を共有し、憩いのひと時を楽しみました。



ひと通り遊んだ後は、おやつ休憩。西アフリカで食べられている魚の餃子やムハムサのデザート、ココナッツドリンクを頂きました。「ムハムサ」とは小麦粉でできた粒状の食べ物で、モロッコなど北アフリカではスープに入れて食べられる事もあるそうです。ムハムサは プチプチ（？）したような独特の食感で日本でも人気が出そうなおいしさでした。



休憩をして、ガールスカウトのお姉さん達に

よるカンガの始まりの物語り劇。ガールスカウトのおねえさん達はキッズが会場に到着する前に集まって、入念なりハーサルと準備をしていたのです。そのため、子供も大人も見入ってしまう興味深いお話でした。劇中の登場人物が身に付けていたのが、物語の中心「カンガ」です。カンガとは東アフリカの布のことで、色がとても鮮やかできれいでした。劇



の後は、実際にカンガを身につけてみて、最後に記念写真を撮って、おしまい。 イベント盛りだくさんの一日で、たくさんのお友達が増えました。



3. 在日アフリカ人家族の生活を考える会

1) 概要

「在日アフリカ人家族の生活を考える会」は、「子供とアフリカ」を対象とするアフリカンキッズクラブから派生した、日本でアフリカにルーツを持つ家族にフォーカスした取り組みである。アフリカと日本などにルーツを持つ子供たちの日本やアフリカでの子育てをどうすれば良いか、子供の背景にある在日アフリカ人のお父さんお母さん、日本人のお父さんお母さんは日々どのようなことを抱えているのか、アフリカンキッズクラブの大人版として、取り巻く問題にポジティブに取り組み社会に発信している。

(AJF ホームページより)

「在日アフリカ人家族の生活を考える会」は 2009 年 1 月よりワークショップを始め通算 6 回、2009 年度に 2 回、2010 年度にも 2 回のワークショップを開催している（表 2）

回	タイトル	開催月
第 1 回	日本に嫁いで 9 年 在ビアと日本の子育て奮闘記	2007. 6
第 2 回	セネガル人お父さんから聞く、日本の子育て	2007. 11
第 3 回	セネガル子育てレポート	2009. 7
第 4 回	南アと日本、生活と学校を体験する	2009. 9
第 5 回	在日アフリカ人コミュニティへの HIV/AIDS 予防啓発活動の取り組み	2010. 7
第 6 回	結婚、移住してガーナを生きる日本の女性たち	2010. 9

表 2 これまでに開催された、在日アフリカ人家族の生活を考える会

3) 活動報告

第3回 セネガル子育てレポート

開催日時：2009年7月4日午後1時～3時20分

会場：早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター会議室

参加者：8人

保育：スタッフ2人、保育対象者7人

【内容】

トゥンカラさんを講師にお招きし、セネガルの子育てについて伺いました。この日はセネガルでの子育て経験がある方3人も参加しており、セネガル子育ての印象、日本での子育てとの比較、セネガルの主婦・働く女性について話しました。

- ① 背景…2009年2月から4月にかけて家族3人でセネガルへ里帰りをしたトゥンカラさん一家。日本で生まれた1歳半のお子さんにとっては初めてのセネガル。今回はダカールで過ごしたほか郊外へ旅行にも行った。
- ② セネガル子育ての第一印象…大家族の中、近所の人々からレストランの店員まで誰か知らが子供の相手をしてくれた。女性だけでなく、男性もおむつ替えや着替えなど子供の面倒をみることに慣れているようで、お昼寝をすることもできた。
- ③ 育児用品…セネガルでは多くの場合、服を作った時の残り布を使った布おむつを使用しているが、お金を出せば日本にあるような育児用品がそろう。
- ④ 日本での子育てと比較して…まずは、家族構成。セネガルにも核家族はいるが、すぐには思いつかない程少ない。そのためか、セネガルの人たちは大家族のなかで悩みを出し合いながら暮らしていると感じた。大家族のなかで暮らすと子供もたくましくなるような気がする。母親が一人で子育てをしなくて良いという環境なのはうれしいが、大家族には大家族の課題がある。日本から行くと、おむつ交換のタイミングや食べ物、就寝時間に関してなじめない人もいるだろう。実際、セネガルで暮らす外国人のなかには、ローカルなセネガル料理は子供に食べさせない、と明言する人もいるし決まった時間になったら子供は自分の部屋で一人で寝るよう指導している人もいる。
- ⑤ セネガルの主婦…子どもの面倒をみるということに関しては、男性も慣れているから動いてくれるが、食事の支度は女性の仕事というようにジェンダー分業がかなりはっきりしている。子供でも、女の子たちは食事の準備にかりだされるが男の子たちは女の子たちがテーブルの準備や料理の手伝いをしているときに遊んでいたりする。
- ⑥ 働く女性…働く女性もいるが、昼休みに自宅に帰って来ることもあるので、日本に比べて家族がそろう機会がとて多い。

第4回 南アと日本、生活と学校を体験する

開催日時 2009年9月5日 午後1時～3時20分

会場 平山郁夫記念ボランティアセンター会議室

参加者 11人（担当理事、事務局長を含む）

保育 スタッフ4人 保育対象者3人

【内容】

津山直子さんをお招きし、南アフリカと日本での体験談・考察伺い、そのあと参加者間での質疑応答を行いました。

津山さんの報告

- ① 南アで生まれ育った子供たち…1992年に日本国際ボランティアセンター（JVC）のスタッフとなり、1994年から南アで活動。南アで結婚し二人の子供を授かった。
- ② 日本の学校で学ぶ機会を…JVCの事業が一区切りついこと、子供たちに日本の義務教育も体験させたいという思いから2009年日本に帰国。子供たちも日本で学ぶことを望んだため、2008年に帰国することを決めた。日本での住居は小さな村でと思っていたが、友人知人からの体制が整っているとの情報を得て、新宿区に住むことに決めた。
- ③ 子供たちの学校での体験…中学校・小学校とも小規模校の良さがあるようだ。中学校は学年が10人、1クラス、小学校も学年で24人1クラスであった。中学生の娘は自分は南ア人であると思っている、南アの学校に帰りたがっているようだ。小学校の息子は最初日本語がうまく出来なくてクラスの仲間に入るのが難しかったようだが、英語のできる友達に声をかけているうちになじんで、ずっと日本の学校にいたいと言っている。学校に楽器があること、近くに公園があることなど公共サービスの面で南アと日本の違いを感じている。
- ④ 今後について…少なくともこの先1年は日本にしようと思っているし、言葉の事を考えると2年くらいは日本にいて次のことを考えたい。いずれにしても、子供たちが将来どこで高等教育をうけどこで暮らしていきたいか考える上で、両方の国で生活していくことは良いことだと思う。

参加者の感想

・新宿区の学校の話にびっくりした。川崎市の小学校は1クラス40人、個人面談も短い時間で先生は「問題ありません」というだけなので。日本は南アよりも多様性を求めず、問題のない人を作ることを志向しているような気がする。

・連れ合いが勤める国立の学校では、通訳など全く派遣されていないようだ。自治体レベルで対応が違うのではないと思う。

第5回 在日アフリカ人コミュニティへのHIV/AIDS 予防啓発活動の取り組み

開催月：2010年7月

会場：早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター会議室

出典：在日アフリカ人コミュニティへのHIV/AIDS 予防啓発活動の取り組み—市民社会団体によるナイジェリア人同郷団体との協働の道のり

【内容】

川田薫さんを講師にお迎えし、在日ナイジェリア人同郷団体とのHIV/AIDS 予防啓発活動の共同の道のりをお話していただきました。

- ① ナイジェリア人コミュニティ…日本で就労しているアフリカ人はナイジェリア、ガーナの人口でほぼ半数を占めていて、ナイジェリア人はその中でも最も多く、コミュニティの活動も活発である。出身国と民族別に同郷団体を設立し、関東では約10団体が活動している。民族的特徴はイボ民族出身者で占められていることであり、会員の相互扶助やアイデンティティ確認の場となっている。
- ② ナイジェリア人におけるHIV/AIDS…ナイジェリアのHIV/AIDS 感染人口は比較的小さいといえるが、治療へのアクセスは10%程度とわずかである。ナイジェリアのHIV/AIDS の治療環境は十分とはいえず、予防に関する教育は難しい。それは「性の話題への内的姿勢」に起因する。HIV/AIDS という性行動と結び付けられる病気は話題にすることがタブー視されやすいのである。陽性者はHIV 陽性者であることを打ち明けられず問題を一人で抱え込まなくてはならないし、正確な情報にアクセスする機会も限られている。日本人が活動する際には、このような母国での背景を踏まえなければならない。
- ③ ナイジェリア人コミュニティとのHIV/AIDS 予防啓発事業…アフリカ日本協議会(AJF)では1年以上前からヨルバ人団体に会議室を提供している。その定期ミーティングに何度も足を運びまとめ役のヨルバ人にこちらの意図を説明し、信頼感を獲得していった。このつながりが下地にあったことで予防啓発活動と無料健康相談会に関する提案をしやすい環境になった。こうして2008年8月、健康相談会と感染症のミニ講座を開催した。内容や進行方法など試行錯誤だったが、同郷団体と共同で開催できたことは大きな一歩であろう。その後、2009年5月にはイボ人との健康相談会が実施されるが、ナイジェリア人の知人の助けを得ても、コミュニティに信頼が置けるかわからない団体の事業を受け入れることは容易ではないということ有力なリーダー不在のなかでいかに相手を巻き込んでいくかという戦略について考える機会となった。
- ④ 今後…男性への啓発だけでなくアフリカ人女性を対象とした啓発活動、在日アフリカ人には市民社会団体と同郷団体がさらに連携していくことが重要である。

第6回 結婚、移住してガーナを生きる日本の女性たち

開催月：2010年9月

会場：早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター会議室

出典：特集3 日本に息づくアフリカ 結婚移住してガーナを生きる日本の女性たち

【内容】

若林チヒロさんに、ガーナに暮らす日本人女性のお話をいただきました。

- ① ガーナ人と日本人の結婚…来日するガーナ人は1990年代から急増しているが、その経緯や就労、結婚の状況は他のアフリカ人と似通っている。現在は新規に来日する人が減少し、30代頃に来日したガーナ人がほぼそのまま高齢化している。男性が8割以上を占め、結婚している人の大部分は日本人女性との婚姻である。日本人がガーナ人と知り合う契機は、彼らの居住地と同様に都市に集中しているが、滞在が長期化するにつれ生活費や住居費の安い郊外に移動している。

② 日本人妻の移住生活

・ガーナへ…ガーナで日本人配偶者として在留届を出している人は2008年では全員女性で、40～45歳の年齢層が最も多い。これは結婚出産を経て生活が安定し準備態勢が整ってからの移住であるからであろう。また、両親は日本に残ったまま親戚や祖父母に子どもの養育を任せている人もいる。日本人妻にとっての移住の契機で一番多く聞かれたのは夫の強い希望である。近年の上向きのガーナの経済状況は、母国に少なからずチャンスがあることを意味し、日本での「自由がない」生活と比較してガーナへの帰国を強く希望する要因になっているようだ。子の教育面も要因に挙げられたが、妻自身が日本から出たかったという状況は聞かれなかった。

・ガーナでの暮らし…インターナショナルスクールと呼ばれる私立校に子供を通わせている人が多いようである。さらに日本語補習校へ通わせると、教育費はかなりの金額に及ぶ。その他、病気治療や日本へ帰国する費用などの為の貯蓄も必要である。日本人妻の職業は専業主婦、日系企業の被雇用者、自営業の3パターンに分けられるが先に示した生活を考慮すると、一般的なガーナ人に比べて相当な所得が必要である。時間的には、就労を続けながら子の日本語学習を継続させることは容易ではない。その他生活上の課題としては、ガーナ人家族との関係、医療、日本にいる親、自身の老後などが挙げられている。

- ③ ガーナを生きる日本人妻たち…印象的だったことは彼女らの適応力やコミュニケーション能力、洞察力や慎重さであった。移住している日本人妻は「自立して」自分の人生を自分で選んでいるように見えた。ガーナへ移住した日本人妻たちはその能力で移住後の生活を調整し生きる場を作り出している。彼女たちのような女性が生きやすい社会、より多様な選択が尊重される社会こそが豊かな社会なのではないかと考える。

【発行】

特定非営利活動法人アフリカ日本協議会

〒110-0015 東京都台東区東上野 1-20-6 丸幸ビル2F

TEL 03-3834-6902 / FAX 03-3834-6903

Website <http://www.ajf.gr.jp>

e-mail info@ajf.gr.jp

2011 年 7 月発行